

医療現場、VR活用広がる リハビリ、不安障害の治療 で効果

会員限定記事

2023年11月1日 05:00

道内の医療現場で仮想現実(バーチャルリアリティ、VR)の活用が広がっている。けがや病気で失われた身体の感覚の回復に役立てるリハビリのほか、嘔吐(おうと)恐怖症といった不安障害(精神疾患)の治療など、幅広い分野で効果が確認されている。

■どこでも同じ質 少人数で提供可能

「できた！」

「上手ですね」

札幌中央病院(中央区)で9月、リハビリをしていた女性(74)は、理学療法士に声を掛けられると笑顔を見せた。VR用のゴーグルを着けた女性の視界には、左右に次々円が現れ、両手に持つコントローラーを近づけると「ピコン」と音が鳴り「あっぱれ」と表示された。

女性は昨年9月に脳梗塞を発症、今年6月には心不全となり、入院していた。手足の筋力が弱り歩行が不安定になっていたが、通常の歩行訓練と、体幹やバランス感覚の回復に効果があるVRを使ったリハビリを続け、「歩けるようになってきて効果を感じる」と涙をにじませた。

同院は8月、リハビリ用の医療機器「mediVRカグラ」を導入。5種類のメニューがあり、けがや病気による歩行機能や認知機能の改善に効果があるとされる。リハビリは1回当たり10～15分で、これまで入院、通院患者30人ほどが週1回～毎日体験した。他の基本プログラムと一緒に保険適用で受けられる。

同院リハビリテーション科長で理学療法士の伊藤崇倫(たかのり)さん(39)は「歩く速度が上がり、歩行時の方向転換のバランスが良くなるなど効果のある方が多い」と話す。

患者の内面に変化をもたらすVRもある。南平岸内科クリニック(札幌市豊平区)は一昨年、独自にVRを制作。自分や他人が嘔吐することなどに恐怖や苦痛を感じる「嘔吐恐怖症」と、人と食事をするに強い不安や緊張を感じる「会食恐怖症」の治療に活用する。

VRでは居酒屋、病院、学校などの場面や、相手を1人や大勢に設定できる。嘔吐恐怖症の患者には、相手が気持ち悪そうにしたり、吐いたりする場面を段階的に見せ

る。会食恐怖症では、相手の人数や顔の向きを変えていく。周囲の音量や、相手をロボット型やリアルに近い人間に変えるなど、細かく調整できる。

治療は1回最低20分以上。臨床心理士らが付き添い、患者の不安の度合いに合わせて場面を設定する。保険適用の診察料約1200円を基本に、時間や重症度などに応じて料金を加算する。高所恐怖症など他のVR治療を含めてこれまで約120人が体験した。

野呂浩史(ひろし)院長は「苦手な物に実際に向き合うには、VRがないとなかなか難しい。VRを使うことで患者本人に自信が付くなど変化は大きい」と語る。

米グーグルのストリートビューを使うところも。花川病院(石狩市)では、認知症患者が専用ゴーグルを着け、ストリートビューで生まれ育った街やなじみのある風景を眺めてもらい、脳の活性化を図るリハビリを試験的に実施している。

体験者は3週間ほどで着替えを自力でできるようになったり、精神的に安定したりするなどの変化が見られている。北海道文教大(恵庭市)と連携して症例を集めており、多数の患者に効果が認められればリハビリのプログラムとして正式に採用する予定だ。

北海道大学大学院保健科学研究院准教授の寒川美奈さん(54)＝スポーツ理学療法学＝によると、VRは数年前から医療現場で活用されるようになった。寒川さんは「VRを使うと、どこにいても質が同じ治療やリハビリを提供できるのが大きな利点。スタッフの人数が少ない施設でも、リハビリの引き出しが増える。活用は広がっていくだろう」と話している。(尾張めぐみ)



南平岸内科クリニックが制作したVR。嘔吐恐怖症の場合、画面内の人物が気持ち悪そうなきぐさ
をしたり、嘔吐したりする(同院提供、写真を一部加工しています)